

発達に遅れのある子どもとその家族支援に関する研究

— 構造化場面での個別発達支援に関する報告 —

A Study of Family Support for Children with PDD

: Report on Individual Developmental Support in a Structured environment

石岡 由紀¹⁾・杉野 翠²⁾・福井 樹理³⁾・水間 裕子⁴⁾

ISHIOKA Yuki

SUGINO Midori

FUKUI Juri

MIZUMA Yuko

はじめに

今日、子どもをめぐるさまざまな領域で広汎性発達障害をめぐる問題は、大きな論議をもたらしている。十一（2005）は家庭裁判所に係属した少年事件で広汎性（特に高機能）発達障害と診断を受けた少年の3ケースを例に挙げ家庭裁判所に係属するまで児童精神科医による診断を受けておらず、家族や学校関係者は本人が広汎性発達障害でというハンディキャップを持つことに気づいていなかったと報告している。また杉山（2005）はその理由として広汎性発達障害を正しく診断できる医師が少ないことをあげ、彼のかかわる患者数は年々増加傾向にあること、さらに杉山は発達障害というハンディを抱えた児童である以上、早期に見出され早期から親子でハンディキャップに向かいあった方が後年の適応が良いとの提言も行っている。

広汎性発達障害と診断された子どものみならず、発達に遅れを持つ子どもに対して早期発見をすることの意義は否定されることは少ない。しかしその後の対象児に対するケアをはじめとし、対象児をふくんだ家族に対する支援活動などが具体化されないまま、診断だけが行われてもあまり意味のあることではなく、むしろ対象児またはその家族に対する不安感を募らせるだけであろう。

2003年3月には「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」が公表されその中では「教育、福祉、医療、労働等が一体となって乳幼児から学校卒業まで障害のある子ども及びその保護者に対する相談及び支援を行う体制を整備する」とされている。つまり、乳幼児期における主に医療を中心とした早期発見に始まりそれを継続してケアしていく教育、福祉の連携が求められているのである。

本学福祉障害児教育研究所においては、比較的早期に診断を受けた幼児とその家族に対する支援を目的に、就学前幼児（暫定的に就学後のケアも実施し

ている）を対象とした個別支援プログラムを提供し、発達障害を持つ幼児の社会的な適応についての検討を行っている。本稿はその第1回目の報告である。

プログラムの構成

大学の一室を構造化し、お勉強（対面課題・自立課題）、おやつ、遊びを活動の一連としてスケジュールを組み、個別療育を行い、各対象児に個別プログラムを立て、月に2回実践している。1回の療育は45分程度としている。

まずは場所の構造化として、パーテーションを使用し、ワークエリア（対面課題用・自立課題用）、フードエリア、プレイエリア、トランジッションエリアを作った。ワークエリア（写真1）ではワークシステムを使用し、学習課題の方法を対象児に分かり易いように示している。ワークシステムの内容としては、左側の棚に課題を用意し、上から順番に課題を行い、終わった課題は右側の棚に片付けるという方法をとっている。ワークエリアでは、身辺自立課題や学習課題を行っている。フードエリア（写真2）は、指導者やスタッフと一緒ににおやつを食べる場所であり、主に食事のマナー（挨拶）や要求伝達（おかわり要求）などの獲得を目的としている。プレイエリアでは、2～3種類の遊びの中から対象児が好きな遊びを選び、指導者やスタッフと一緒に遊んでいる。遊びを通して、コミュニケーションスキルの向上を目的としている。トランジッションエリアはその日のスケジュールを確認する場所で、トランジッションカードの交換などを行っている。

1) 本学発達教育学部助教授

2) 本学大学院生

3) 本学大学院生

4) 本学大学院生

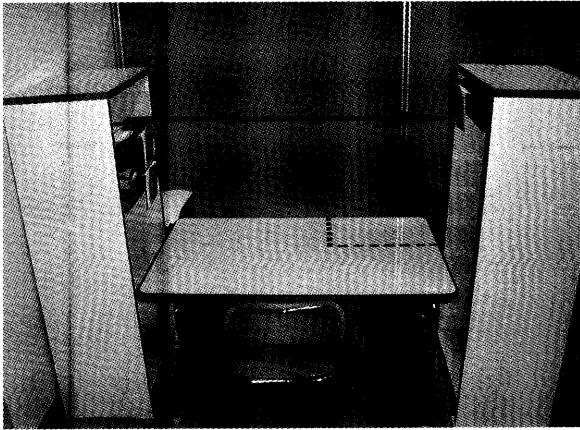


写真1 ワークエリア・対面課題用

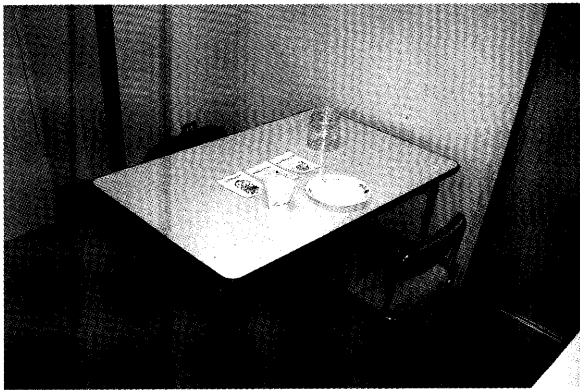


写真2 フードエリア

次に時間の構造化として、絵カードを使用したスケジュールを用意した(写真3)。療育を始める前にトランジションエリアでその日のスケジュールを確認し、各エリアでの活動に移る。1番のカードを活動エリアに持って行き、活動が終わると指導者から終わりを示すお星様のカードをもらう。もらったカードをトランジションエリアに持って行き、2番の活動へ移るといった方法をとっている。

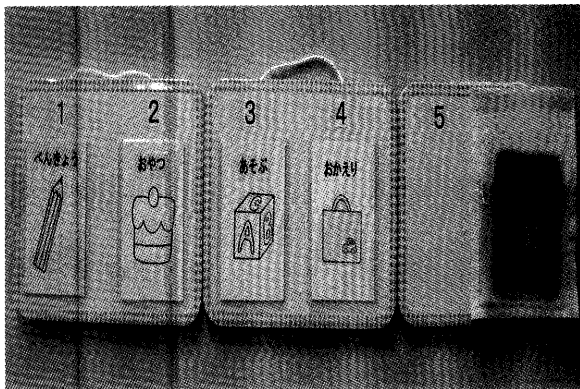


写真3 スケジュール

ケース1

発達支援対象児概要

年齢／療育開始時 5歳6ヶ月 現在 6歳4ヶ月

性別／女児

診断名／ダウン症

知能診断検査 (WIPPSI) / 判定不可能 (2005年5月24日実施)

乳幼児発達スケール (KIDS) / 総合発達年齢 4歳1ヶ月 総合発達指数64 (2005年5月31日記入)

アセスメント

療育を始める前に行った知能診断検査 WIPPSIの結果は上記した通りであった。検査者の質問に対し、口頭で答える検査項目はうまく答えることができなかった。しかし、図形、色、運筆などが混じった検査項目に関しては、取り組む姿勢が見られ、回答数も他と比べると多かった。検査中、できない項目や分からない項目があると、椅子から降り、母親の元へ行く場面が見られた。また、分からない検査項目に関しては、検査者に正誤を確かめながら答える場面が多く見られた。お部屋への入室が容易だったことや、他者とのコミュニケーション能力が高いことから、学習面での理解と自信獲得、言語コミュニケーションの獲得を課題として療育を開始した。

支援の経過：I期(療育開始時) 1～3回

6月から療育を開始し、母親とともに参加。入室、荷物の片付けはスムーズに行えた。スケジュール理解、トランジションカードの移動などは、1回の説明で理解し、しばらくすると、本児自ら考えて行っていた。学習課題は、色の弁別、数概念、運筆、パズルなどを用意した。色に関しては理解しているようで、3色の弁別は黒字のみの指示でも正しく弁別することができた。数の学習では指示された数のマグネットを正しく置くことはできるが、印のないボードには間違った数のマグネットを置くなど、数概念は獲得されていなかった。パズルは簡単なものならばできるが、複雑なパズルに関しては、指導者の指示とは違うことをしたり、途中でやめてしまうなどの行動が見られた。勉強課題の内容が比較的容易なため、意欲的に取り組んではいるが、集中力が切れるとふざけてしまうなどの行動が見られた。ふざけに関しては、加齢時にも行動継続が懸念されるため、反応しないことを母親とともに認識を持った。

支援の経過：Ⅱ期 4～11回

色と形を組み合わせた弁別と模倣課題、絵カードの弁別を新たに加えた。色と形を組み合わせた弁別では、丸と四角の木のビーズを弁別する課題を用意した。弁別指示が図形だったので、正しく弁別できていた。しかし、木のビーズを見本と同じ様に紐に通す課題では、模倣することと、紐にビーズを通すことを要求されているためか、間違えることが多かった。絵カードの弁別では、動物・乗り物・果物の3種類に弁別する課題を用意したが、最初は動物・乗り物・果物の意味が把握できておらず、弁別することが難しかった。徐々に理解していき、しばらくすると、「これはリンゴ、これは果物」と声を出して弁別できるようになった。4回目の療育から、少しずつ躓きだしたのが、数の課題である。数の概念がない状態でのマグネットを使用した課題は、本児には難しかったようで、6回目の療育から、数分のシールを貼ったカードを使った課題(写真1)をマグネットの課題と平行して行った。指導者が指示する数分のシールが貼ってあるカードを選択し、指導者に手渡すという方法を取った。最初は自信がないのか、指導者に正誤の判断を伺う場面が良く見られたが、しばらくすると正しいカードを選択できるようになった。同時に、マグネットでの課題も間違えることが少なくなり、少しずつだが数の概念が獲得されてきた。

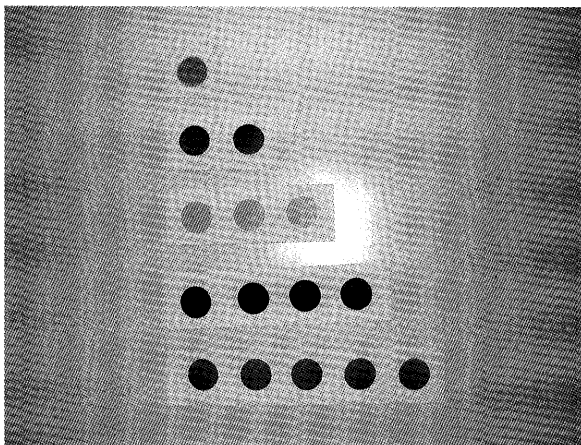


写真4 数の学習課題

本児が療育の流れに慣れ、課題を落ち着いてできるようになってきたので、療育4回目より自立課題を導入した。課題は2つ程度で、指導者との対面課題で行った課題を用意した。自立課題エリアへの移動も容易に行え、指導者がいなくても、一人で課題に取り組むことができた。

支援経過：Ⅲ期 12～20回

数の課題にかかる時間が少しずつ減ってきた。カードを使用した課題(写真1)も正しく選択できるようになったので、マグネットの課題のみとし、数の分解課題(写真2)を新たに導入した。マグネット課題では、3以降の数がまだあいまいなところがあるが、分からなくなっても、指導者と一緒に数を読むと、正しい数のマグネットを置くことができるようになった。平行して行った数の分解では、3の分解、4の分解、5の分解と数を増やしていった。正数のみを使用した分解は、間違えながらも指導者と一緒に行えたが、分解の中に0を入れると、分解することができなくなってしまったので、分解の中から0を取り除いて行った。また、Ⅲ期後半では、数を多い少ないに弁別する課題を新たに加えた。2枚のカードを提示し、どちらが多いか少ないかを弁別する課題であるが、最初は多い、少ないという意味が理解できておらず、弁別はできなかった。2枚のカードを1と5といったように差をつけ、現在では正しく弁別できるようになった。しかし、2枚の差が小さくなると難しいようである。

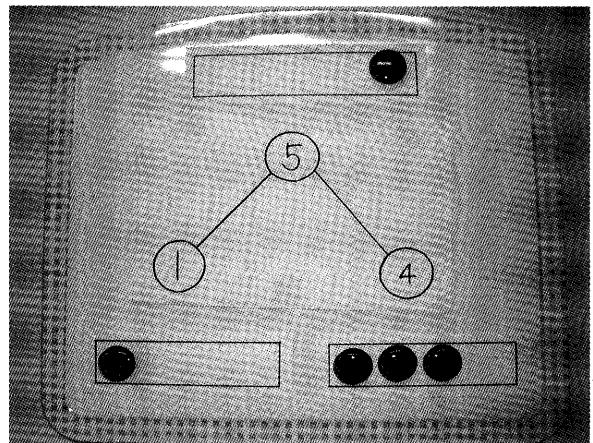


写真5 数の学習課題・数の分解

絵カードの弁別が全て正しくできるようになったので、文字や文章と絵のマッチング課題を新たに導入した。書かれている文字や文章をしっかりと読み、正しい絵カードを選択することができた。しかし、ボールなどののぼす音や、じてんしゃなどの小さい文字が入っていると読めなかった。

自立課題では、ひらがなの運筆を中心に課題を行った。点線がないものは書くことができず、全て点線を入れての課題となった。現在は点線を引く箇所を減らして課題を行っている。

まとめと今後

20回の療育を通して、学習課題に取り組む姿勢が良くなってきた。Ⅱ期の時期には、できない課題があると、椅子から離れ母親の元に行ってしまうなどの行動が見られたが、その行動は徐々に減っていき、できない課題も指導者にできないことを伝え、一緒に課題を行うといった行動に変化してきた。学習課題の場面以外でも、指導者と言葉によるコミュニケーションを取ることが増え、療育開始時に比べると言語能力も高くなっている。今後は、数概念の獲得、ひらがなの練習、言語コミュニケーションの獲得を課題として療育を行っていく。また、本児は4月より小学校に進学するので、小学校での学習面や生活面で本療育を般化できるようサポートしていきたい。

ケース2

年齢／療育開始時 5歳1ヶ月 現在 6歳1ヶ月

性別／男

診断名／自閉症

知能発達検査 (WIPPSI) /測定不能 (2005年5月28日実施)

乳幼児発達スケール (KIDS) /総合発達年齢
3歳10ヶ月 総合発達指数 54 (2005年5月28日記入)

アセスメント

療育開始にあたり本児の母親に本児の様子を聞いたところ、言語理解に関しては、相手の言っていることの意味はしているものの、少し対応できない場面もあり、特に、パニックを起こすと手や足が出てしまうこと、何も無いのに「あっちいけ」という言葉を使ってしまうということに困っているとの報告を受けた。集団生活をとるのが苦手であり、噛む、引っ掻く、髪の毛を引っ張るなどいわゆる問題行動を軽減することを当初の課題として設定した。

支援経過：Ⅰ期 (1回～3回)

療育への参加は、当初主に父親・母親・本児・妹であった。初めての場所や人に対する不安が大きく、激しく泣いて入室を拒否し、「入らへん」「あっちいけ」と拒否の言葉を頻繁に使用する。しかしながら、部屋の様子や、スタッフが遊んでいる様子を見るなど、本児なりに状況を判断しようとする意志が感じられた。新しい場所や人への不安をなくすた

め、本児の好きな遊び (新幹線の写真カード・プラレール) を用意して遊びを通して本児との関係作りをすることを優先した。また、新幹線の写真カードは持って帰ってもらい、次回の療育でも用意していることを約束し、1回目の療育を終えた。その後の療育では、泣いて抵抗はするものの、母親が部屋に入ると本児も「イヤー」と大声を出しながら、母親とともに入室した。本児の好きなプラレールを母親とスタッフで作ったところ、本児は、母親の背中に隠れながらも、スタッフや母親が遊ぶ様子を見て、時折、笑顔も見られるようになり、自分でも電車を動かしたりして遊ぶ姿が見られた。しかし指導者が、本児に近づくと「あっちいけ」と言って髪の毛を引っ張ったり、叩いたりすることがあった。そのとき、本児は母親の顔を見て行為を行うなど、周りの反応により問題行動が強化されているものと思われた。

この頃、本児は幼稚園でも同じクラスのお友だちの髪の毛を引っ張るなどの問題行動が頻繁に見られた。また、加配として本児についていた筆者に対しても「あっちいけ」と言い、噛んだり髪の毛を引っ張るなど問題行動が見られた。問題行動については、相手や周りの大人が反応することで行為を強化しているので、反応しないように心掛けた。クラスの活動には参加できたり、できなかったりと、保育室に長時間いることが困難であった。制作活動に対しては、出来ないといった感情や不安があり、泣いて拒否することが多かった。

支援経過：Ⅱ期 (4回～10回)

カードやワークシステムを使い、視覚的に何をやるのか明確に提示することによって、スケジュールを確認することができ、なにをどれぐらいすればいいのか見通しがつくようになり、トランジションカードを使用し、勉強やおやつといった行動をすることが可能となった。プレイルームにも慣れ、泣かずに入室することができるようになったこの頃、母親の本児のみの来室が多くなる。当初よりも指導者の髪を引っ張るという問題行動は減少したが、母親と指導者が話すことやビデオカメラが気になり、指導者やスタッフを叩きに行ったり、ビデオカメラのコンセントを引き抜くなどの問題行動が残った。スケジュールの理解ができるようになったのを確認して、本児と指導者が対面して行う課題を開始した。課題は、初め本児が難なく出来るであろう課題を選択した。注意がそれやすいため、ブロックやビーズ

などは指導者が1つずつ提示するようにした。

幼稚園でも、筆者に対して髪を引っ張るという問題行動の減少が見られた。プレイルームで時計を利用していたため、時計に興味を見せるようになり、降園の時間や遊びの時間をしきりに尋ねることがあった。クラスの活動にも他の園児と同じように参加できるようになったが、本児の好きなことや興味が他にあると部屋から出て行こうとする行動は、この後も見られた。集団生活のとれない時間の使い方として、絵本を読む・アルバムを見るなどをして時間を過ごすことができるようになった。制作は自分から進んではいるような場面も見られたが、手先が不器用であるため、思い通りに切ったり貼ったりできないことが多かった。この頃、運動会が開催されたが本児に対しては、競技に興味を示したのを確認してから参加することを教職員の共通理解とした。本児は泣いて登園し、落ち着くまで筆者と遊具で遊んだあと競技に参加した。

支援経過：Ⅲ期（11回～16回）

自立課題のワークシステムを理解し、一人で課題に取り組むことが出来るようになった。また、間違えた場合も自己修正が可能となり、スムーズに課題をこなすことが可能となった。数字に興味があり、数字の型はめは、数字を言いながらはめていく姿が見られた。運筆課題は、指導者の援助なしで点から点へ線を引くことが出来るようになった。一人で出来る課題が増える一方、遊びにはあまり気分が乗らない様子で指導者や母親が遊ぶ様子を見るだけであったり、参加した場合であっても時間の前にその遊びを終わりたいことがあった。この頃、絵本の読み聞かせを開始したが、あまり抵抗を見せることなく、イスに座って話を聞くことが可能であった。

幼稚園では、筆者に次の予定や一日の予定を聞くなど、本児なりに幼稚園での生活に見通しをつけようとしている様子が見られるようになり、クラスの活動に参加することが出来るようになった。順番や並ぶことが理解でき、筆者が「〇〇君の後ろ」と声を掛けると並んで順番を待つことが出来るようになった。筆者に対する噛む・髪を引っ張るなどの問題行動はほとんど見られなくなったが、特定の友だちに対して押す・髪を引っ張るなどの行為が見られた。また、筆者に対して膝に乗る・抱っこ・おんぶなど甘え行動が見られるようになった。ジャンケンで勝ち負けの理解は難しい様子だが、他児の様

子を見て、勝つことで自分の思いが通るということが理解できているようであった。ピアノを弾いているところを見るのが好きで、鍵盤ハーモニカは楽しんで取り組むことができた。鍵盤に色のシールを付け、楽譜にも同じようにマークを付けることで正しい音を出すことが出来るようになった。

まとめと今後の課題

筆者は療育場面と幼稚園と環境の異なる両場面で本児の様子を見てきたが、本児が理解しやすいような課題の選択や提示をすることで、本児なりに生活に見通しがつくようになり安定して生活できるようになった。髪を引っ張るなどの問題行動に対しては、「貸して」「入れて」など本児が求めていることを筆者が言葉で表現し提示することで、社会的な方法で自分の意思を伝えることが出来るようになり、クラスの子ども達と遊んだり良好な関係を築くステップになったと考える。

今後は、本児の好きなジャンケンの勝ち負けの理解や、数の概念の獲得に向けて課題を設定している。また、絵本の貸し出しを開始し（写真6）、自分の物と人の物との区別や借りることと返すことの理解に向けて療育を行っていく方針である。

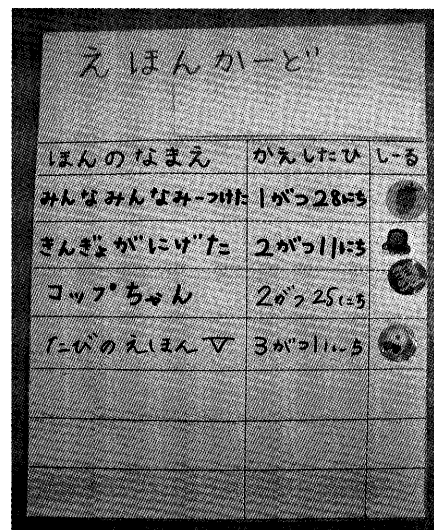


写真6 絵本貸し出しカード

ケース3

発達支援対象児の概要

年齢／療育開始時 4歳0ヶ月 現在 5歳2ヶ月

性別／男児

診断名／アスペルガー症候群

知能診断検査（WIPPSI）／VIQ73 PIQ138

（2005年4月9日実施）

乳児発達スケール (KIDS) / 総合発達年齢 4 歳
2 ヶ月 総合発達指数 104 (2005 年 4 月 11 日
記入)

アセスメント

「WPPSI (ワイプサイ)」により知能診断検査を実施した結果、言語性検査における VIQ が 73、動作性検査における PIQ が 138、IQ が 105 となり、言語性検査の結果と動作性検査の結果の差に、問題が感じられた。さらに「KIDS」によると、8 領域の発達年齢が 3 歳 3 ヶ月～5 歳 6 ヶ月という幅広い結果となり、対象児の発達のアンバランスさが感じられた。

本児が通園する幼稚園から、社会生活適応能力の困難さについての指摘を受けており、保護者は、A 大学病院小児科より本教室を紹介され来学した。本児は、他の園児とのかかわりが上手く持たず、幼稚園側も対応に困惑しているようであった。集団行動をとるのが苦手であり、行動の「始め」と「終わり」が理解し難いという特徴もあった。

セッションを通して本児の特性を明らかにし、保護者の本児に対する理解を深めるとともに、本児の特性を生かしながら、他の人との関わり方や規則を守ることなど日常生活をスムーズに行うことができるように支援する。

支援等の経過：Ⅰ期 (1 回～6 回)

セッション開始当初の課題は、本児の得手・不得手を確認するために端をそろえ点線に沿って折り紙を正しく折る課題、物の名前を覚える課題として、手の絵が書かれたカードを使用して各指の名前を覚える課題、数の概念を理解するためにホワイトボードとマグネットを使用して、示された数を同じ数だけマグネットを置く課題、そして弱い筆圧強化のための、点と点を鉛筆で結ぶという運筆課題などを取り入れた。数字には興味がある様子で、数の概念は楽しそうに自分で考えながら取り組んでいた。折り紙を点線にそって折るといった課題は、なかなか点線に沿って折ることができなかった。運筆は点から点に線を引くというもので、始めは線を横に書く課題、次に線を縦に書く課題に取り組んだ。開始当初の書く線は薄く、波線のようになり、安定感が無かった。「キュー、ピタッ」と指導者が支援していると、自ら「キュー、ピタッ」と言いながら取り組むようになり、波線状の線から徐々に直線に近づいていった。

各指の名前を覚える課題は、手の絵に色を塗った各指のカードを作り、そのカードを提示し、名前を覚えていくというものであった。最初カードに書かれている指の絵に自分の指を合わせ、カードに書かれている文字を自ら読んでいた。本児がカードに書いてある文字を読むので、その指を指導者がどの指かと問うと、絵と同じ指を自分の指から選ぶことはできなかった。この指の課題もそうであったが、知らないことを質問された時や出来ない事や苦手な課題になると、机の下に潜り込むという行動が多々みられた。また、「終わり」を理解できないことがあり、何度も続けて課題をしてしまうことがあった。

支援等の経過：Ⅱ期 (7 回～10 回)

新しい場所やセッションにも慣れ始め、元気良く挨拶をして入室をするようになった。

開始当初から取り組んでいた運筆の課題は、回を重ねるごとに筆圧が強くなっていった。(写真 7)

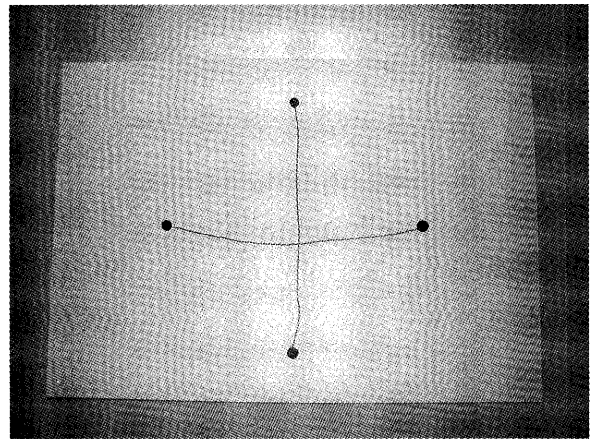


写真 7 運筆課題

また苦手な課題で分からない場合においても、机の下に潜り込むという行動もなくなり、指導者の説明を静かに聞く姿勢が見られるようになり、課題に取り組むようになった。はさみで紙を切るという課題では、点に沿って切る練習を繰り返し行った。切る部分が長い場合は、最後まで真っ直ぐ切ることができなかったが、切る部分を短めにするすることで、徐々に線にそって切れるようになっていった。

本児と対面で行う課題に加え、セッション開始当初から行っていた本児の得意な課題を用い、本児一人で行う課題場面を設定した。この時期から果物や動物など種類別に絵カードを弁別する課題や、数の多い・少ないを考える課題など新しい課題が増えていったが、初めて行う課題を気にする様子は見られなくても、以前のように席から離れることはなかった。

しかしこの頃、課題や遊びの時間にあまり問題が見られなくなったが、帰りの時間になると、座り込んで帰る用意になかなか取り組まない時があった。本児の場合、自閉症児特有のこだわりにも偏りが見られ、スケジュールの終わりであることは理解できていても、なかなか部屋を退室できない時もあった。いわゆる問題行動と考えられるこれらの行動に対しては、指導者・スタッフ一同、反応をできるだけひかえ目にするように心がけた。

支援等の経過：Ⅲ期（11回～19回）

新しい課題も数回行うと指導者の援助無しでできるようになり、少しずつ内容を高度なものへと変化させていながら療育が進んでいっている。特に視覚的にはたらしかけながら行う数に関する課題は、とてもスムーズに行っていけるようになり、足し算を用いたもの（写真8）へさらに変化させていこうと指導者は考えている。遊びの「終わり」にもきちんと対応できるようになり、時間になったら片付けを出来るようになった。おやつに関する時間は、開始当初からあまり問題は見られなかったが、「いただきます」等の挨拶もきちんと出来、支援者との会話も弾み、楽しい時間となっているようだ。それと同様に、遊びの時間もスペースを全体的に使ってボール遊びをしたり、自ら電車を動かして「〇〇駅」と話したりしながら指導者と関わりをもって楽しく遊んでいる。

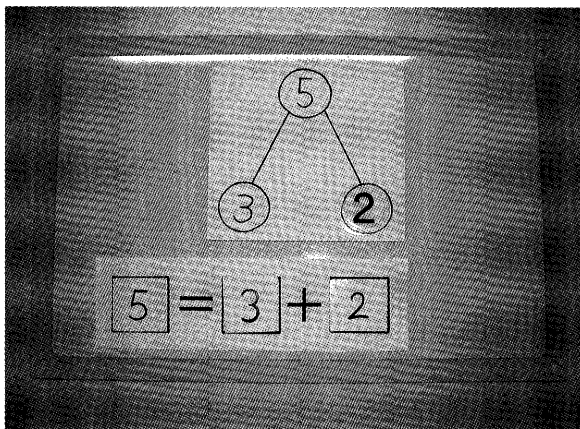


写真8 足し算を用いた数の概念

課題・おやつ・あそびという、セッションの活動内容に関して目立つ問題は少ない。活動の終始の理解も徐々に習得していき、幼稚園からの指摘にあった「社会生活適応能力」も、視覚支援を行う中ではあまり感じられず、男児に対して「構造化における視覚支援」が有効な方法であるのではないかと感じ

られる。

しかし、活動の流れの中で見られる、カードを持って移動する際に走ったり、物乱暴に片付けたりする一つ一つの行動が、セッション当初から時折見られる。セッションに慣れてきた現在は、それらの行動が目立つようにもなった。独立課題時にも、周囲から見られていることやビデオカメラが気になり、「ワー」と大声を出すというような言動も見られ始めた。

まとめと今後の課題

1年間の療育を通して、スケジュールの流れにそった行動もでき、課題にも意欲的に取り組んでいるように観察される。この春より本児は年長となり、来年度は小学校就学となる。それに向け、文字・数理解などいわゆる学習課題に取り組めるようにすることと同時に、今後は、集団活動の時みられるようないわゆる問題行動を減らしていけるような支援のあり方を考えていく必要がある。また新たに、図書の貸し出しのスキルも行い始め、借りることや返すことの理解を深めていこうと意図している。

おわりに

上記してきたように、本プログラムに参加している幼児は集団生活においてなんらかのいわゆる不適応行動がみられた子どもたちである。特にことばによる理解が不得意であり保護者または保育者の言語指示に従うことが困難であった。そこで本プログラムでは彼らが比較的得意とする視覚による指示理解能力を伸ばすことを利用したプログラムを展開するようにした。そのため、スタッフの指示はカードや実物を提示することによる視覚支援と最小限の言語指示を使用して行った。その結果今まで困難だとされていたおとな側からの指示理解が可能となった。本プログラムは日常に生活場面とは違いあくまでも彼らが理解しやすいように構造化された部屋で行われたものである。しかし、日常場面とは違ってはいるものの、ある程度構造化されたものを提示することによって指示理解が可能となっており、子どもによっては、本人自らそれを般化させようとする姿勢も見られている。さらに、本プログラムにおいては対象児のみならず、その家族支援を視野に入れた活動を併せ持っている。本活動に関しては別稿にて報告する予定である。

今日幼稚園・保育所を中心とした保育現場では、

発達に遅れのある子どもたちに対する理解は進んできており、発達障害のある子どもの在籍に対しては比較的寛大であるといえる。実際どの幼児も地域の幼稚園・保育所に在籍しており、保育者をはじめ周囲の保護者からも暖かい支援を受けている。しかし幼稚園・保育所からは診断を受けた幼児に対する受け入れはしたものの、実際その障害特性に対してどのように対応していけばよいのかというジレンマをかかえて日々の保育を運営しているというのが現状であろう。今後は本プログラムに参加している子どもたちが在籍している幼稚園・保育所を中心に彼らの発達および特性を理解する機会が増えることを期待している。

参考文献

- 十一元三「少年事件・刑事事件と広汎性発達障害」そだちの科学No.5 2005
杉山登志郎「アスペルガー症候群の現在」育ちの科学No.5 2005
文部科学省「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」2003
Shira Richman 井上雅彦訳『Raising a Child Autism A Guide Applied Behavior Analysis for Parents』東京書籍 2003
諏訪利明「TEACCH に学ぶ自閉症児へのアプローチ」発達No.85 Vol.22 2001
杉山登志郎「アスペルガー症候群および高機能発達障害を持つ子どもへの援助」発達No.85 Vol.22 2001